

比較文化 II [第2回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●映画『ラッチョ・ドローム』に見る、音楽と文化の伝播、そして差別と迫害の歴史

◆ラッチョ・ドローム Latcho Drom

インドから西アジア、東欧、そして西欧へと流れていったロマ民族の足跡を音楽を中心にたどり、彼らの歴史や現在の生活を映像詩的に綴ったドキュメンタリー映画

1993年 フランス／カラー／103分／シネマスコープ

監督・脚本：トニー・ガトリフ

製作：ミシェル・レイ＝ガブラス／音楽：アラン・ヴェーベル

美術：デウニ・メルシエ／撮影：エリック・ギシャール

1993年 カヌ国際映画祭《ある視点》部門賞

1996年 全米批評家協会 NSFC賞

◆トニー・ガトリフ監督

アルジェリア生まれ。父親はフランス人、母方がロマの血をひくフランスの映画監督

『ガスパール／君と過ごした季節（とき）』（1990）／『ラッチョ・ドローム』（1993）

『モンド』（1995）／『イ・ムヴリーニ』（1996）／『ガッジョ・ディーロ』（1997）

『ベンゴ』（2000）／『僕のスウィング』（2002）／『エグザイル』（2004）

トランシルヴァニア（2006）／怒れ！憤れ！ - ステファン・エセルの遺言（2012）

ジェロニモ 愛と灼熱のリズム（2014）

◆「ラッチョ・ドローム」とは

ロマ語でラッチョは「良い」、ドロームは「道」を指す

合わせると「良い旅を」という意味になる



●ロマ民族の概要

◆ロマ民族の出自と移動

総人口は推定800万～1200万人といわれる民族集団

6世紀から7世紀（一説では、5～6世紀、または9～10世紀）にかけて、インドの北西部（ラジャスタン地方）から移動を開始

移動開始の原因は、現在でも判明してない

10世紀頃、イランではインドの王から1万2000人の楽師を贈られた

その子孫がペルシアの各地に配属された

11世紀頃、ロバを連れて、その背に家財道具を乗せ、歌をうたい、弓をかきながら旅する集団が近東諸国にいたとされる

14世紀になって、東ヨーロッパやバルカン半島に移ってきた

その後、西ヨーロッパへ

近年は、アメリカ大陸やオーストラリアにも移住

彼らの生業は移動生活に支障をきたさないものに限られる

移動手段として用いる馬の売買

連れ歩く動物に芸を仕込んで見世物に（たとえば、熊つかい、馬の曲乗り）

楽士、占い師、アクロバットなど芸能に従事し、行く先々で人々に娯楽を提供
恒常性のある職業としては、金属加工や籠作りなど

◆ロマとジプシー

ジプシー Gypsy という名は、「エジプトから来た者たち」Egyptian に由来する
→差別的な用語なので、今日では「ロマ」（英語の man と同じ意味）と呼ぶことが多い
いっぽうで誇りを込めて「ジプシー」と呼ぶ動きもある
彼らの言葉はロマ語（ロマニ語）と呼ばれる
ロムとは、部族集団を指すサンスクリット語「ドームバ domba」から派生
および現代インド語のドム dom ないしドゥーム dum と音韻的に対応
サンスクリット語では「歌唱や音楽で身をたてる下層カーストの男」という意味
現代インド語でも、同じような意味で用いられる
「放浪する楽師のカースト」（シンド語）、「下賤の民」（ラーンダ語）、「旅まわりの楽師」（パンジャブ語）など
ロマ語はインド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に分類される
しかし現在のロマの多くが使用している言語は、ヨーロッパに移動してくるまでに通過した多くの国の言語を取り入れて変化してきた

◆ロマの社会的連帯と迫害

ロマは伝統的に自分たち以外とは通婚してこなかった
他の人々と自らを峻別して、民族としてのアイデンティティを保ち続けてきた
ロマ全体を統一する組織や連帯意識は存在しなかった
定住を嫌うロマは、宿营地から宿营地へと移動を続けてきた
一か所にとどまって集落を形成しても一時的なもの
テントや家馬車に住んでいたが、第二次世界大戦以降、各地で定住化が進行
ロマは、しばしば追放や迫害の対象となってきた
1933 年から始まったナチスによる「ジプシー絶滅政策」
ヨーロッパ各地で 50 万人を超えるロマが犠牲になった
強制労働、ガス室送り、断種手術、人体実験
また現在もロマへの差別と迫害、地域住民との軋轢は少なくない
スリや泥棒などの犯罪も多い

●『ラッチョ・ドローム』の構成と音楽

◆ラジャスタン（インド）

冒頭、砂漠を歩きながら子供が歌うのは「Sat Bhayan Ki Ek Behanadly（7 人の兄弟と 1 人の妹）」。「妹が兄弟たちに「水も、足を包む葉っぱもない、砂漠の果てに連れていかないで」と懇願する。本作のロマの放浪の旅の出発点となるラジャスタン地方で、実際に活動するグループ“Divana”のメンバーが出演。サーランギ、カマンチャなどの弦楽器や、タブラ（太鼓）、木片を打ち鳴らすカタル（拍子木）などを演奏。回りながら舞う Suva Devi は、地元では神に捧げる“Kalbelya”の踊り手として知られる。家財道具をすべて積み込み、移動していく人々たち。音楽家の集団でありながら、鍛冶屋や床屋で生業を立てていた。そんなロマの原型が、ここにもある。くるくる旋回する女の子の踊りは、スペインのフラメンコに通じるものがある。

◆エジプト

日干し煉瓦の家から、にぎやかな音楽が聞こえてくる。踊っている男たちの顔を見ると、ラジャスタンの人たちと似ている。これは、本作の音楽部門を担当、民族音楽学者でもあるアラン・ヴェペールに 75 年に発掘されたグループの演奏。83 年ピーター・ガブリエルのアルバム『Passion』へのコラボレートでデビュー。ジャズピアニストのキース・ジャレットらにその即興性が賞賛された。楽器は 2 本の弦を弓で奏でるラバープ、タブラなど。作品中で演奏されるのは「Bambi Saidi」「Yo Dorah Shami」。最後に見えるのが、エジプトの母なる大河、ナイル河だ。

◆トルコ

アジアとヨーロッパの架け橋であるイスタンブール。アジア側から船に乗ってボスポラス海峡を渡ると、もうそこはヨーロッパだ。イスラム教のモスクが並び、尖塔からアザーン（お祈り）の音が響き渡る。クラリネットのハッサンを中心とした 6 人編成のアンサンブルが登場。ウードのほか、打楽器ダルブカは世界的に広まっている。彼らがレストランで演奏し、花売りの女の子が踊る軽快な曲「Hicaz Dolap」は、ベリーダンスのイントロなどで使われるもの。居酒屋には男たちばかりが集う。近代化が進んでいるとは言え（どうやら酒を飲んでいるらしい）、トルコはイスラム社会なので、女はこのような場所に来ることができない。

◆ルーマニア

ルーマニア・クレジャニ村出身、映画出演もする世界的人気者の“義賊楽団”が登場。バイオリン、ツインパロム、フルート、アコーディオンなどで編成される。ロマの陽気で楽しい側面が強調される。しかし一転して、木の下でたたずむ 1 人の子供の前で老ニコラエが弾くのは、

89年のチャウシェスク政権崩壊を歌った名曲「Balada Conducatorului（独裁者のバラード）」。「独裁政権の非道さ、殺された市民の恨みが、物悲しい旋律となって漂う。「銃を人々に向け、ただ殺す。チャウシェスクよ、聞け」と歌う。弦に弦をこすり合わせて出すきしむ音、村人たちに囲まれて魅せる速弾き「Rind de Hore」など、彼らの持ち味は曲芸的な即興演奏にある。

◆ハンガリー

ハンガリーの平原を走る汽車の中で、窓にもたれて少女が歌う。「世界中から嫌われ迫害される身、呪われた宿命」。東欧革命のあと、ロマへの迫害は激しさを増した。ロマというだけで住民から殺されたり追い出された。いっぽう母子を元気づけるため、線路脇で大騒ぎをする集団は“Kek Lang”。Rostaz、Horvathの2家族で構成される。グループ名は「青い炎」の意味。2つのスプーンを背中合わせにぶつけて、つぼの口を叩いてリズムを刻むシーンは、ラジャスタンのカタルを思わせる。バイオリンの他に、最近はギターも取り入れる。足を振り上げ、手で触れて踊るスタイルは、スペインのフラメンコと類似点がある。

◆スロヴァキア

スロヴァキアの世界遺産、スピシュスキー城を眼前に、雪の中で老女が1人悲しげに歌うのは「アウシュビッツ」。腕には強制収容所時代の整理番号が入れ墨されている。Zとはドイツ語で「ジプシー」を指す Zigeuner（ツィゴイネル）の頭文字だ。収容所で殺された夫の写真を握りしめる。ロマ民族がナチスに虐殺されたのは、50万人とも言われる。雪の林の中では、居住地を追われたロマたちが、木の上に家を作って暮らす。木の上で男が歌う。「苦難の道をここまで生き抜いてきた。一つの不幸が次の不幸を呼ぶ。犬のような扱いはもうごめんだ。ドイツに向かおう」。

◆フランス

馬車で移動するロマは、あてもなく移動するのではなく、あらかじめ道筋を決めておくのが普通だ。しかし、追い立てられて別の場所に行かなければならない場合もある。そんなときにも仲間と合流できるように工夫する。仲間集めに車でキャンプ地を奔走する口髭のギタリストが、チャボロ・シュミット。54年パリ生まれ。すでに生きた伝説と化した音楽家。数々のジャズフェスティバルに参加。定住し、ベンツに乗るようになった成り金ロマと、昔ながらの馬車暮らしで旅を続ける伝統的な暮らしとの対比が鮮やか。ロマが守り神としているのは、聖母マリアに付き添っていた黒い顔の侍女サラである。この黒い守り神の前では、スローな「Kali Sara」、宴会では名曲「Thavolo Swing」を演奏。イスラーム圏と違って、宴会に女たちも参加している。フランス南部の地中海に面した町サント・マリー・ド・ラ・メールでは毎年5月末にサラの祭りが行なわれ、ヨーロッパ各地からロマが集まる。海から来たという伝説にちなんで、

サラの像をかついで海に入る。

◆スペイン

少年が「俺たちの体に流れる血、それはジプシーのフラメンコ」と歌う。リズムの渦の中、赤いスカートをひるがえし、粹に踊るレメディオス・アマジャは62年、アンダルシア地方のセビージャ生まれ。カンテ（フラメンコの歌）が本業だ。少年の歌に合わせて、踊る女性ダンサー。子供の頃から大人に混じって音楽的なトレーニングを積み、一人前の音楽家になっていく。老婆も心から楽しそうに踊っているのが、ほほ笑ましい。ここでもロマは町から追い出される。ロマの家は、煉瓦で戸も窓も封じられた。郊外の丘に野宿するロマたち。自分たちを追出した町並みを見下ろしながら女性が歌う。「なぜその口は、私にツバを吐くのか」と。丘の上から「El Pajaro Negro（黒い鳥）」を絶唱するラ・カイタは、バダホス出身の歌い手。

（解説：小島令子）

●映画『ラッチョ・ドローム』を観て、考えてみよう

◆ロマもインド・ヨーロッパ語族の一員

ロマ語は、インド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に分類される

ウルドゥー語やヒンディー語、カラーシャ語などと同じ

インド・イラン語派は、西の故地から東へとやってきた（カラーシャ族、インド人など）

ロマは、逆に西へと向かった（南ルート・北ルート）

一波だけでなく、何回にも分かれて移住していったと思われる

インド亜大陸の北西部の山岳地帯には、ロマと同様の音楽家集団がいる

チトラルのドム、フンザのペリチョ、ラダックのモン、東のネパールにも同じような楽器編成を伝える

◆ロマは西北インド時代の文化をかなり保持してきた

金属加工（鍛冶屋）などの、低カーストの仕事で収入を得る

もともとが牧畜民（遊牧民）であったので、動物を扱うのが上手

音楽や芸能（見せ物、曲芸）も重要な仕事

音楽は、ロマのアイデンティティー

人が移動（移住）すると、文化が直接伝わる（文化の伝播）

◆ロマはアジアからやってきた異民族ゆえ、ヨーロッパで迫害されてきた

定住しないで移動するため、社会に同化しない

差別され、社会の常に最底辺で生きるしかなかった

ロマの居住地域は、犯罪の巣でもあった

ナチス・ドイツが徹底的に弾圧、迫害を実施した

1933年から始まった「ジプシー絶滅政策」

「遺伝性疾患継承者防止法」（いわゆる断種法）を發布

純粋なロマと外国籍のロマがまず分けられた

やがてドイツ内の全ロマが対象に

ユダヤ人とロマは「外国種の血統」とされ、第二級の「国民」とされた

次々と法律が發布され、ロマを強制収容所送りに

入れ墨を入れられて管理された

ガス室で殺害されたり、人体実験（手術）をされたりした

50万人が犠牲になったと言われる

ベルリンの壁崩壊後、またロマへの弾圧が強まっている

経済が不安定になると、弱者へのしわ寄せが行く

◆いまのシリア難民問題との類似性

地続きで国境を接するヨーロッパは、昔から漂泊の民を受け入れざるを得なかった

ユダヤ人やロマを迫害した忌まわしい歴史への悔悟

国外へ逃れたシリア難民は400万人以上

多くがヨーロッパ（ドイツ）を目指す

ヨーロッパにたどり着けるのは6%

ジプシーを訪ねて

関口義人／岩波新書

私が何度も訪れているパキスタン北部に、ドムと呼ばれる音楽師たちがいる。

かつてドムは王室に所属し、王国の行事やポロの試合などで特別な音楽を演奏する役目を担っていた。彼らは土地の人間ではなく、南からやってきたという。

調べてみると、西アジア各地にもドムと呼ばれる民族が多く居住し、彼らのドマニ語は欧州で使われるロマニ語と近縁関係にあることがわかる。つまりドムは、ロマやツイゴイネル、ジタン、ヒターノなどと各地で呼ばれる漂泊の民、すなわちジプシーの片割れだったのだ。

こうした知識が日本で簡単に入手できるのも、ジプシーについて精力的に情報発信を続けてきた著者のおかげである。ジプシー音楽に魅了されたのがきっかけで商社マンから音楽業界へと転身した著者は、十年にわたってバルカン諸国や中欧だけでなく、中東やイランでもジプシーの居住地を訪ねる旅を繰り返してきた。

土地によって暮らしぶりはさまざまだが、社会の最下層に押しやられ、差別と貧困のなかで生きていることに変わりはない。ときには音楽家の大歓待を受ける機会にも恵まれるが、よそ者への警戒から難民のテントに近づけないこともあった。

そんななかで頼りにしたのが、ジプシーを支援するNGOやジプシー出身の若い通訳だ。インターネット時代になって情報の共有化が進み、新しい発想で行動する改革者も増えてきた。定住しなくてもインターネットが使えるケータイが、ジプシーの意識を変えつつある。

本書の後半には、ジプシー音楽史を広範に見渡し、これまでの研究を概観する二章が用意されていて、重宝に使える。

世界不況で国境を越えて移動するジプシーへの反感が強まり、欧州各地で排斥運動が起きている。移民にどう対処していくべきか、ジプシーの現状を知ることには大きなヒントになる。（評・丸山 純）
（月刊『望星』二〇一二年三月号／東海教育研究所）